

平成 21 年度 特別展関連講座 (2009/11/08)

## 賀来一族のまなざし ―一族にみる「近代化」―

大分県立歴史博物館 主任学芸員／平川 毅

### はじめに ―学問の国・おおいたの賀来一族―

#### ○中世の賀来家

平安時代以降における豊後武士団の一大勢力であった大神[おおが]氏の流れをくむ。賀来荘（現・大分市賀来）を根拠地として、長く豊後守護大友氏の支配下にあった。

#### ○近世の賀来家

おもに豊前を中心に、村や町の有力者としての地位を築き上げていく。

醤油・酒・酢の醸造、絞油、紙漉、染物、鋳物、蠟燭製造など、さまざまな事業に取り組みとともに日本・中国の学問書を数多く購入し学問にはげむ。

#### ○学問の国・おおいた

幕末のおおいたは、「豊後の三賢」と呼ばれる三浦梅園（1723～1789）・帆足万里（1778～1852）・広瀬淡窓（1782～1856）に象徴されるように、さまざまな学問分野で多くの人材を輩出する。

彼らは、分野を超えて熱心に交流。→ それぞれの学問の向上につとめる。賀来家の場合、とりわけ日出藩の儒学者帆足万里と深く交流。

### I 賀来惟熊の大砲鑄造事業

#### 1 海防強化と大砲鑄造

18 世紀後期から、西洋列強の船が通商を求めて東アジアへ進出。1840（天保 11）年にはイギリスと中国の間でアヘン戦争が勃発。→ 日本では海防の強化が緊急の政治課題となる。このとき、海防強化の中心事業となったのが鉄製大砲の鑄造である。

鉄製大砲の鑄造には、大量の鉄の溶解を可能とする反射炉〔はんしゃろ〕の建設が不可欠。ヨーロッパの軍事科学にもとづく高度な技術力と豊富な資金力が必要。→ したがって、ほとんどの事例は江戸幕府や藩の主導により行われたもの。

#### ○賀来惟熊（1796～1880）

嘉永 6（1853）年、宇佐郡佐田村（現・宇佐市安心院町）の賀来惟熊〔これたけ〕は、

本藩である島原藩の資金援助を受けることなく大砲鑄造事業に取り組む。

帆足万里が推薦した日出藩の砲術家関讚蔵（1827～1864）を顧問にむかえ、4人の息子（惟寧・惟準・三綱・惟舒）とともに佐田神社において事業を開始。

佐田村内の宇中村から得られた陶土に砂・石灰を混ぜた三和土を焼成して耐火レンガを製造。安政2（1855）年、この耐・火レンガを用いて1基1炉の反射炉を建設。

## 2 大砲鑄造、成る！

反射炉が完成した安政2（1855）年から2年余りの間に、惟熊らは8門の鉄製大砲を鑄造したとされる。彼らが鑄造した大砲は、本藩の島原藩だけではなく、佐伯藩や日出藩にも配備されたといわれており、さらにその技術は遠く鳥取藩へ伝えられる。

佐賀藩の大砲鑄造事業には、蘭学者はもとより鑄物師 [いもじ]・刀工・和算家も動員されている。→ 大砲鑄造という近代的事業は、日本の伝統的な知識・技術を基礎にヨーロッパの軍事科学を融合させることにより達成。

### ○東洋と西洋の融合

惟熊は、農業のかたわら鑄物業を手がける。これを家業として受け継いだのが次男惟準 [これのり]（1827～1897）。惟準は、関讚蔵に師事し大砲鑄造に関する専門知識を習得。→ 惟熊・惟準の鑄物に関する知識が事業に活かされる。また、惟準は現場担当者の中心人物として事業を成功にみちびく。

反射炉・大砲の設計あるいは弾道計算など、大砲鑄造の全過程において和算の知識が使われた。→ こうした面では長男惟寧 [これやす]（1824～1869）が中心人物。

## 3 大砲鑄造と本草学者賀来飛霞

### ○一族としての偉業

高度な技術力と豊富な資金力が求められる大砲鑄造事業は、惟熊と4人の息子たちだけで成し遂げられたわけではない。→ 賀来一族のさまざまな協力。

とりわけ、事業に深く関わったのは従弟の本草学借賃来飛霞 [ひか]。

### 【資料①】8月20日付、飯島義角→賀来飛霞（賀来飛霞関係資料）

其後打絶御無音打過不本意奉存候、追■「          」相成程処、弥御安康被為入奉賀上候、当表御舍兄様御方皆様御安静被為入、是亦奉欣上候、扱先頃より大之助大煩鑄立方二付而

者、何ヶ御心配被下候由之処、創業第一之反射竈思わ敷無之趣、是等者全大之助不仕合而已二無之、先者御家之御不仕合とも可申、於拙子も残念無此上、依之筋々得と遂穿鑿取調置申度奉存候間、御繁用之御中甚申上兼侯へ共、何卒反射竈絵図并仕法御認被下侯義者相叶申間敷哉、此段御窺申上侯、扱又■左衛門認侯大煩図、大之助義者元より手二入侯事故、北節入用ニも有之間敷候間、拙子へ譲呉侯義者相成間敷哉、此段乍御面倒御■■之事故、御咄合被下置候様、是亦御願申上侯、右両条若相叶侯ハ、弟吉田益大夫此度長洲詰罷越候間、此者へ御渡被下候様奉存侯、右者御窺御願迄如此御座侯、恐惶謹言

飛霞のもとには、事業に関する詳細な情報が集まる。

**【資料②】9月19日付、飯島義角→賀来飛霞(賀来飛霞関係資料)**

秋冷相成候処、弥御安康奉賀上候、然者大之助鑄立之筒、一昨十七日二様打有之候処、壹丁ハ■際より抜ヶ、壹挺者同所ニひゞれ出来、■杖ヲ差入れ侯へハ■出候様相成、源兵衛献上も■抜ヶ、民七献上ハひゞれ出来、忽微煩井九郎左衛門献上計無難ノ土御座候、尤装葉四百目・五百目・六百目と一挺三枚つゝ御座候、此段御承知迄申上侯、大之助へも右之趣乍御世話御進達可披下候、以上

飛霞は大砲鑄造に関する一定の専門知識を修得しており、性能とともに事業を成功にみちびいた中心人物の一人に位置づけることができる。

**○帆足万里の位置**

賀来一族共通の師であり、一族と関讀蔵をはじめとする周辺の知識人・技術者を一つに結びつける。 → 事業の成功を語る上で重要な存在。

## II 賀来佐之と賀来飛霞

### 1 賀来佐之（1799～1857） —シーボルトの高第一

#### ○帆足万里に師事

賀来佐之〔すけゆき〕は、現在の豊後高田市高田に生まれる。14歳で帆足万里に師事し、本格的に医学を学び始める。

佐之が18歳で父賀来有軒〔ゆうけん〕を亡くしたため、万里は親代わりとなって佐之を教育。文政6（1823）年、佐之は杵築で医業を開いたが、万里との父子のような・師弟関係は生涯続く。

#### ○長崎・京都への遊学

文政9（1826）年から、佐之は長崎に遊学し蘭学を学ぶ。このとき、出島オランダ商館医シーボルト（1796～1866）に師事。また、尾張の本草学者伊藤圭介（1803～1901）と出会い交流を深める。

長崎から帰郷した佐之は島原藩領宇佐郡佐田村（現・宇佐市安心院町）で蘭方医として医業を再開。評判がよく多くの患者を集める。その後、しだいに中国医学とヨーロッパ医学との折衷医学の立場を強めていく。→ 師万里の助言にもよる

天保5（1834）年から、弟賀来飛霞とともに京都に遊学し、本草学者山本亡羊〔ぼうよう〕（1778～1859）に師事。本格的に本草学を学ぶ。

#### ○島原藩医としての業績

漢方・蘭方折衷医学を実践し、臨床を重視して医療技術をみがいた佐之の評判は本藩の島原藩にも届く。天保13（1842）年、佐之は島原藩医として召し抱えられる。

→天保14（1843）年、島原藩で最初の人体解剖を行う。

→種痘〔しゅとう〕（牛痘〔ぎゅうとう〕法）の普及に尽力。

→弘化4（1847）年、『墨是可新話〔めしこしんわ〕』を完成させる。

## 2 賀来飛霞（1816～1894） 一幕末三大本草学者の一人一

### ○本ご草学とは

中国医学に付属する薬物学。薬を自然界から入手する以外に方法がなかった時代だけに、自然界の何が薬として利用できるのかを研究する学問。

### ○帆足万里・十市石谷（1793～1853）に師事

賀来飛霞は、佐之を兄として現在の豊後高田市高田に生まれる。1歳で父を亡くしたため、兄佐之と師万里が親代わりとなる。

万里から医学と本草学を、杵築藩の画人十市石谷〔といち せきこく〕からは写生画の技法を学ぶ。石谷は、飛霞の写生図について天性の才能があり、草花を描かせると自身もまったくおよばないと評価したと伝えられる。

### ○京都への遊学

天保5（1834）年から、兄佐之とともに京都に遊学し、本草学者山本亡羊に師事。その後、現地における実物調査―採薬〔さいやく〕―にもとづく本草学の研究に本格的に取り組む。

飛霞の採薬の旅は、九州、近畿、東北、北陸・甲信越の各地方におよび、採薬記や膨大な動植物写生図をのこす。こうした飛霞の業績は、とりわけ近代植物学への橋渡しの役割を果たす。

## 3 万里・圭介・シーボルト 一最大の師・盟友一

### ○帆足万里

佐之・飛霞兄弟にとって最大の師。学問はもとより、兄弟の生き方においても大きな影響を与える。

### ○シーボルト

佐之とは師弟関係を越えた学術交流を行う。

【資料③】1820年9月5日付、シーボルト→賀来佐之（賀来飛霞関係資料）

（前略）何とも申上兼侯得共、川鼠壺、式正御捕御贈被下侯様奉頼侯、最焼酒ニ漬二披成様ニ奉頼侯（後略）

○伊藤圭介

佐之・飛霞兄弟の最大の盟友。明治 14（1881 年）、飛霧と圭介は『東京大学小石川植物園草木図説 巻一』を出版。本書の植物解説は飛霞が執筆。

### III 「写生」と「写真」・自然をきわめる —加来飛霞の写生図—

賀来飛霞の写生国をみると、動植物の形状を捉えた輪郭線から、色の強弱や陰影等を精緻に表現した彩色にいたるまで、彼が対象の姿を正確に描くことに徹底してこだわったことがうかがえる。写生図の作成を含め、動植物の生態を詳細に観察・記録すること自体が究極の目的。飛霞にとって、写生図は本草学者としての最高の表現方法。

こうした点は、とくに植物写生図において端的に表れる。

飛霞の植物.写生国には、本来は地中に隠れている根がよく描かれる。従来の本草学では、薬用とはならない根を描くことはない。これは、植物の全体像を正確に観察・記録しようとする彼の研究姿勢を示す。

かなり早い時期から、植物の全体像だけではなく、雄しべ・雌しべ・花卉の数を含め、花の・つくりを部分図として詳細に描く。文政 12（1829）年、伊藤圭介が日本に初めて紹介したスウェーデンの植物学者リンネ（1707～1778）の植物分類法は、雄しべと雌しべの数による分類を基本とする。

飛霞は、「写生」と「写真」という言葉を明確に使いわける。→ 植物の形状や花のつくりを描き、これに彩色したものが「写生」、彩色はせず各部分ごとに色を指定しただけのものが「写真」。

現在、飛霞の写生図に対する思想や哲学を物語る資料は見当たらない。彼にとって「写生」図とは、実物の色に限りなく近づけたとしても、そのものの色を正確には表現し切れないもの、一方の「写真図」は、彩色を除いて客観的:な植物の形状:観察を目的としたものと考えられる。

「写生」と「写真」—この二つの異なる方法を駆使し、花のつくりを含めて植物の形状を精緻に表現した植物写生図は、飛霞が本草学の枠を超えて、近代植物学の領域にまで到達していたことを示している。

結びにかえて ー二つの「近代化」・賀来一族から南一郎平へー

#### ○賀来一族の業績にみる「近代化」

「近代化」＝「西洋化」ではない。日本・中国の伝統的な知識・技術を基礎に、西洋の新しい学問を主体的に摂取し、さらに融合させることにより不可能を可能にすること、あるいは従来知識・技術の精度を高める

#### ○二つの近代化

富国強兵・殖産興業政策に象徴されるもので、西洋列強と対等な国力を得るために彼らの知識・技術を導入して「近代化」を達成。推進主体は「国家」。 → 「国家的な近代化」

人々の日常の営みに底流する知的好奇心や、よりよい暮らしへの欲求を糧として成し遂げられる知識・技術の革新。結果的に「近代化」を果たしてはいるが、それが当初から目的とされてはいない。 → 「暮らしのなかの近代化」

賀来一族の業績はいずれも「暮らしのなかの近代化」に位置づけられる。 → 賀来惟熊は、大砲鑄造事業を地域産業として位置づけていた可能性。

#### ○南一郎平（1836～1919）

農業の面で「暮らしのなかの近代化」を達成した人物。広瀬井路を開発し、宇佐市駅館川右岸の台地上における水田開発を可能にする。

広瀬井路の開発にあたっては、義父惟熊の技術協力があつたとされる。 → サイフォン式用水路の設置も惟熊の助言によるもの？

一郎平は、広瀬井路の開発が評価されて、明治時代には内務省農務課に出仕。明治政府の水利開墾事業に従事し、日本三大疏水ー福島・安積疏水、京都・琵琶湖疏水、栃木・那須疏水ーの開発に取り組む。 → 「暮らしのなかの近代化」が「国家的な近代化」へと展開。

◎「暮らしのなかの近代化」と「国家的な近代化」は連動する。幕末以来の各地における「暮らしのなかの近代化」の広範な積み重ねが「国家的な近代化」を可能にし支える。 → 学問の国・おおいたにあつて、知識・技術の革新を成し遂げた人物を多く輩出した賀来一族は、まさに幕末の「華麗なる一族」。

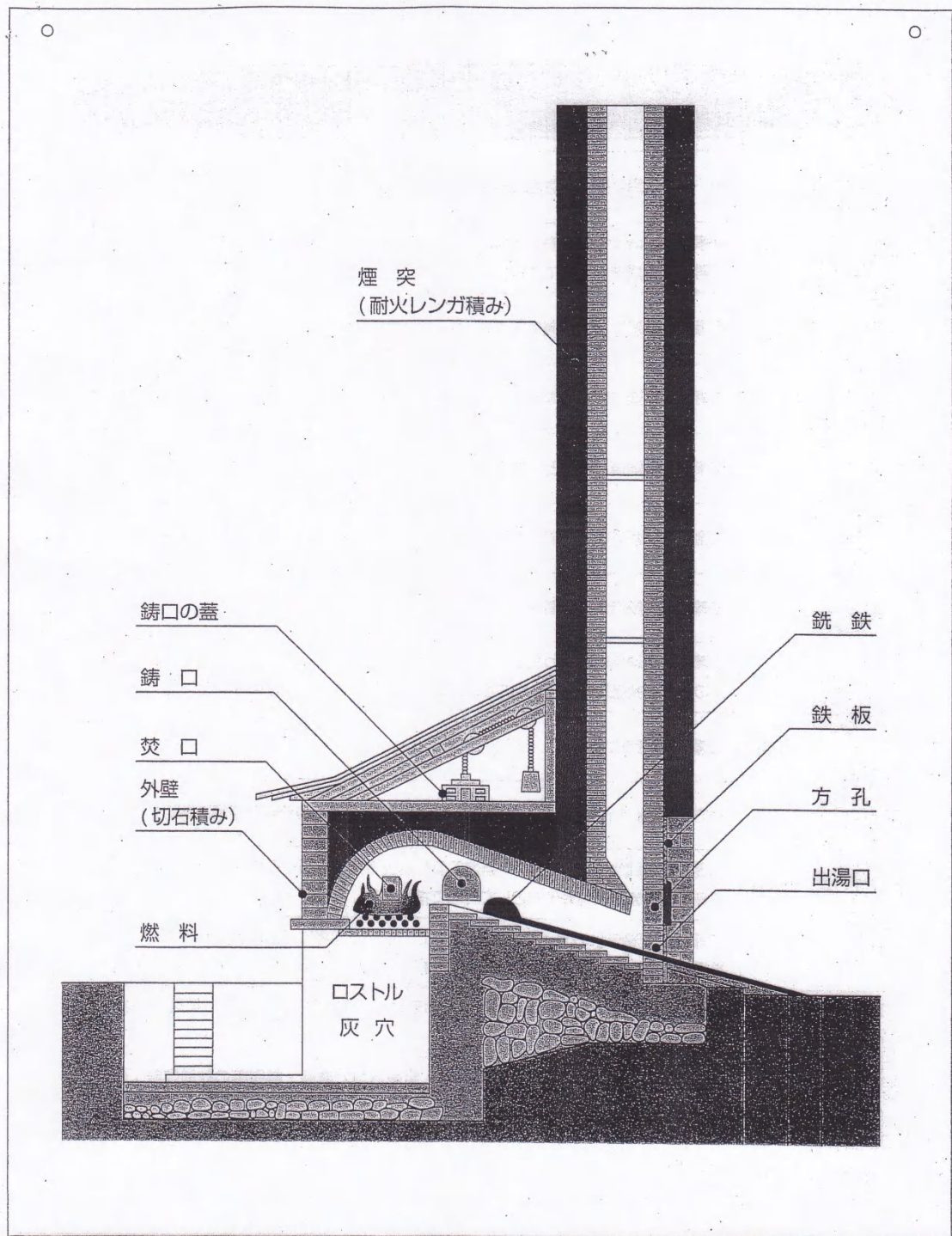
## 賀来家の大砲鑄造事業関係年表

| 年号    | 西暦   | 賀来家・大砲鑄造事業関係事項                          | 参考事項                              |
|-------|------|---|-----------------------------------|
| 寛政8年  | 1796 | 賀来惟熊「かく これたけ」生まれる(～1880年)               |                                   |
| 文政7年  | 1824 | 惟熊長男・惟寧「これやす」生まれる(～1869)                |                                   |
| 文政10年 | 1827 | 惟熊次男・惟準「これのり」生まれる(～1897年)               | 関讚蔵「せき さんぞう」生まれる(～1864)           |
| 天保2年  | 1831 | 惟熊三男・三綱「みつつな」生まれる(～1874年)               |                                   |
| 天保11年 | 1840 |   | アヘン戦争勃発(～1842年)                   |
| 天保13年 | 1842 | 惟熊四男・惟のぶ「これのぶ」生まれる(～1921年)              |                                   |
| 嘉永3年  | 1850 |   | 佐賀藩、築地反射炉建設に着手(～1852)             |
| 嘉永5年  | 1852 |   | 薩摩藩、磯反射炉建設に着手(～1857)              |
| 嘉永6年  | 1853 | 惟熊、島原藩の命を受け、島原藩宇佐郡佐田村で大砲鑄造事業に着手する       | 佐賀藩、多布施反射炉を建設                     |
| 安政元年  | 1854 |   | 江戸幕府、伊豆韮山に反射炉を建設 水戸藩、那珂湊で反射炉建設に着手 |
| 安政2年  | 1855 | 惟熊ら佐田神社境内に反射炉を建設、その後2年余りの間に8門の鉄製大砲を鑄造する |                                   |
| 安政4年  | 1857 | 三綱、鳥取藩で反射炉を建設し、2門の大砲を鑄造する               |                                   |
| 安政5年  | 1858 |   | 長州藩、萩に反射炉を建設か(不詳)                 |
| 文久2年  | 1862 | この頃、惟のぶが佐伯藩で22門の大砲を鑄造する                 |                                   |
| 慶応2年  | 1866 | 惟熊、佐田神社境内の反射炉を取り壊す                      |                                   |
| 大正13年 | 1924 | 惟熊、従五位を贈られる                             |                                   |

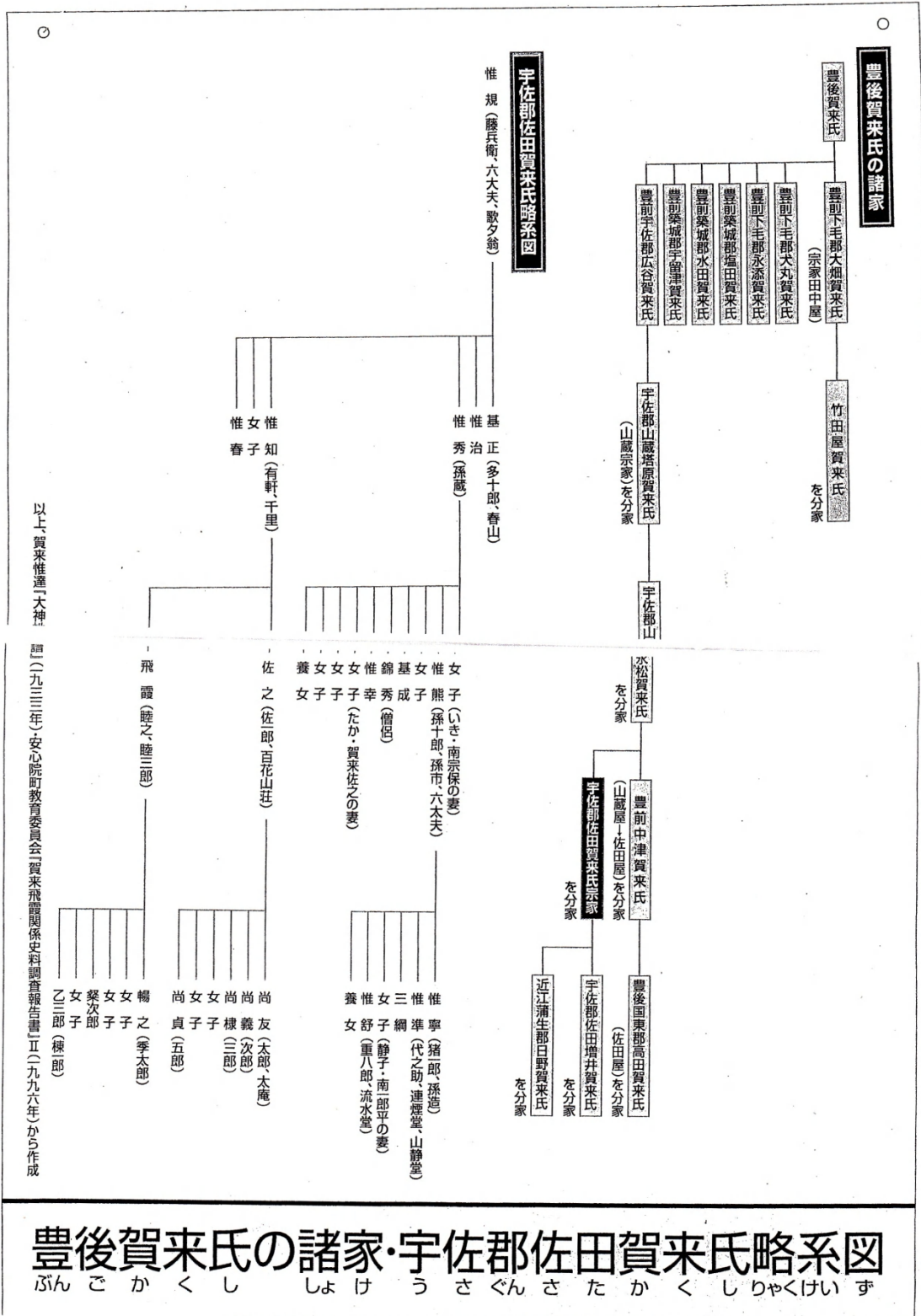


## 南一郎平業績年表

| 年号    | 西暦   | 事項   |
|-------|------|--|
| 天保7年  | 1836 | 南一郎平、島原藩領宇佐郡金屋村の庄屋家に生まれる   |
| 安政3年  | 1856 | 父宗保「むねやす」の死去にともない金屋村庄屋役を相続、宗保は広瀬井路築造工事の再興・完成を一郎平に遺言する              |
| 文久元年  | 1861 | 広瀬井路築造工事の再興を図るが、着工することなく翌文久2年に断念する                                 |
| 慶応元年  | 1865 | 広瀬井路築造工事を再興する  |
| 慶応2年  | 1866 | 工事資金の調達が困難となり江戸幕府から公金を借用する   |
| 明治元年  | 1868 | 公金の返済ができず入牢するが、御許山騒動の発生により助かる                                      |
| 明治2年  | 1869 | 広瀬井路の築造が国の直営工事となる  |
| 明治3年  | 1870 | 広瀬井路の通水式が行われる 国の工事資金援助が終了、残りの工事は一郎平の単独事業となる                        |
| 明治6年  | 1873 | 広瀬井路が完成する  |
| 明治8年  | 1875 | 松方正義「まつかた まさよし」の招きに応じて東京へ上り、内務省農務課に勤務する                            |
| 明治11年 | 1878 | 福島・安積疏水「あさかそすい」築造工事の着工準備を担当、これ以降、工事完了(1882年)まで技術専門官として現地で指揮する      |
| 明治15年 | 1882 | 京都・琵琶湖疏水「びわこそすい」について、京都府知事に「意見書」「水利目論見書」を提出、その後、琵琶湖第一疏水が明治23年に完成する |
| 明治16年 | 1883 | 栃木・那須疏水「なすそすい」築造のため現地で測量を行う、その後、那須疏水は命じ18年に完成する                    |
| 明治19年 | 1886 | 内務省を退職し「現業社」を設立する、全国各地で隧道・橋梁等の鉄道敷設工事に従事する                          |
| 大正8年  | 1919 | 東京で死去する  |



反射炉の構造模式図  
 はんしゃろ こうそうもじきず



**豊後賀来氏の諸家**

豊後賀来氏

豊前下毛郡大知賀来氏  
(宗家中屋)

竹田屋賀来氏  
を分家

豊前下毛郡永添賀来氏

豊前築城郡塩田賀来氏

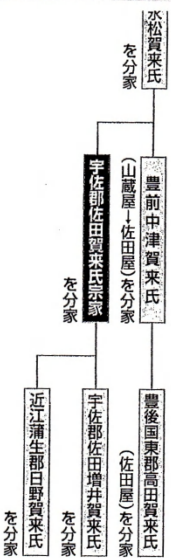
豊前築城郡水田賀来氏

豊前築城郡宇留津賀来氏

豊前宇佐郡広谷賀来氏

宇佐郡山藏隆賀来氏  
(山藏宗家) を分家

宇佐郡山



**宇佐郡佐田賀来氏略系図**

惟規 (藤兵衛、六大夫、歌夕翁)

基正 (多十郎、春山)

惟治 (孫藏)

惟秀 (僧侶)

惟知 (有軒、千里)

惟春子

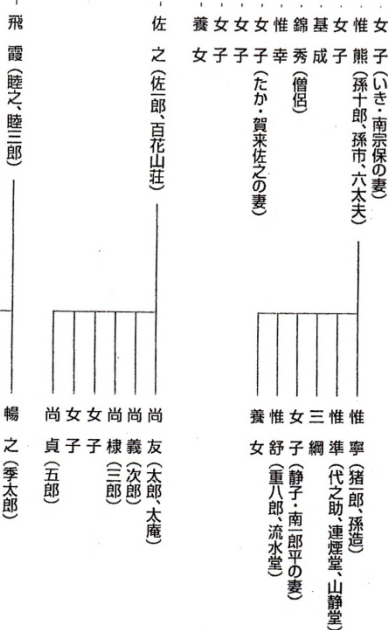
養女子

錦秀 (僧侶)

惟幸 (たか、賀来佐之の妻)

養女子

佐之 (佐郎、百花山荘)



以上 賀来惟通「大神

話」(一九三三年) 安心院町教育委員会「賀来飛龍關係史料調査報告書」II (一九九六年) から作成

**豊後賀来氏の諸家・宇佐郡佐田賀来氏略系図**

ぶんごかくし しょけ うさぐん さたか くしりゃくけい す